

【記念講演】

禪研究の意義と国際的禪研究
ネットワーク構築の必要性
—「武漢大学国際禪文化研究中心」と
「東洋大学国際禪研究プロジェクト」—

伊 吹 敦*

(日本 東洋大学)

はじめに

本日、「武漢大学国際禪文化研究中心」の設立記念式典において基調講演をする機会に恵まれましたことは、私にとって大変な光栄です。武漢大学の関係者の皆さん、並びに仲介の労を執られた何燕生先生に心から感謝申し上げます。

さて、そもそも仏教は全ての人に救済を齎す普遍宗教で、禪宗も当然その性格を分有しています。そのため、禪宗は中国で成立し、中国社会に根ざした著しい特色を持っていますが、現在では広く世界に受け入れられているのです。そして、禪宗はそれに特有の思想によって、伝わった先の社会や歴史と密接な関係を持ちつつ、豊かな文化を育んできました。従って、禪の意義を理解し、人間の将来に生かすためには、世界中の禪の研究者の協力が不可欠です。「武漢大学国際禪文化研究中心」という名称の「国際」とはその意味でしょうし、今日、私がわざわざ日本から招かれたことも、そのような認識を武漢大学の方々が共有していることを示すものだと思います。

*東洋大学文学部教授

本日の講演では、武漢大学に「国際禅文化研究中心」が発足することに因んで、禅研究の意義と国際的な協力体制の必要性について、私が普段考えていることを述べまして、武漢大学の先生方のご批判を仰ぐとともに、先生方と意見の共有を図りたいと考えております。

1. 禅と禅研究の意義

禅が目指すのは「悟り」と呼ばれる禅体験の獲得です。これを得るために禅僧たちは出家し、行脚し、高僧の弟子となり、修行に励むのです。「悟り」の獲得を目指す——これが仏教の本来の目的であることは自明のことのように思えますが、実は、これこそインドの部派仏教以来、長らく見失われていたものなのです。その意味で、禅は仏教本来の立場に立ち返ったと言えるでしょう。そして、それが禅宗の成立を待って初めて可能となったということは、禅宗が中国仏教の諸宗の中で最後に成立し、最も中国化の進んだ仏教であるという点から見て、中国の風土が大きな影響を与えたことを示すものに違いないでしょう。

農作業等の労働も修行の一部と捉え、共同生活の中で「悟り」を目指すという禅宗の生活形態そのものがインドにはなかったものですし、弟子の「悟り」を確認するために、不可解な言葉を投げかけたり、時として怒鳴る、殴る、蹴る等の暴行を伴う禅問答を発展させたことも禅の独創です。禅宗で行われた、あるいは現に行われている言説や行動は全て「悟り」を基礎に置くものなのです。そして、その「悟り」、即ち、禅体験そのものが持つ「無分別」「不二」といった性格が、皇帝権力が絶大な中国という国家にありながら、極めて魅力的な、何ものにも囚われない絶対的な自由の思想を生んだのです。

禅という世界に類を見ない特異な思想を理解することは、それ自体、決して容易なことではありません。例えば、禅問答をいかに理解すればよいのかということは、当時の俗語の研究が進んだ今でも、手の付けがたい

「無孔鉄鎚」のようなものです。これを正しく理解し、問答を行っている人の気持ちを的確に掴む方法を見出すことは禅研究の一つの大きな課題であると言えます。

更に問題を複雑にしているのは、禅の思想が時代とともに大きく変化したということです。最初期の禅思想を代表し、菩提達摩（生歿年未詳）の作として伝えられてきた『二入四行論』は、6世紀中葉の成立と見ることができますが、8世紀前半には既に禅の精髓を説くものではないとされるようになりました。また、馬祖道一（709-788）などの機鋒に満ちた禅問答はそれ以前にはなかったものですし、宋代に一般化した公案を用いた指導法も、馬祖にはありませんでした。更には、元・明以降に普及した、いわゆる「念仏公案」もそれ以前にはなかったものです。このように、長い歴史の中で中国の禅は、時とともに大いに変化していったのです。それは、一面では禅思想そのものの論理的展開であったと言えますが、一面では中国社会の変化に伴ってそうならざるを得なかったという面もあったのです。私たちはその経緯を理解せねばなりません。それはそのまま禅に固有のものが何であるかを理解することに外ならないからです。

しかし、禅の変化は単に思想に止まるものではありませんでした。特に禅宗教団と社会との関係に見られた変化は更に大きなものだったと言えるでしょう。禅宗は労働と「悟り」との一致を唱えました。これは原理的には、生業をもつ在家であることが「悟り」という点で、全く障害にならないことを示すものです。それゆえ禅宗では、極めて早い時期から居士が重要な役割を果たしてきました。神秀（?-706）や慧安（?-709）の弟子の侯莫陳琰（660-714）、慧安の弟子の陳楚章（生歿年未詳）、馬祖の弟子の龐居士（?-808）などはその例です。

時代が降って宋代になると、新たな支配層となった士大夫の間で禅が大いに流行します。禅は士大夫の支持のもと、国家の公認を得、教団は巨大化してゆきます。すると、それまでと打って変わって皇帝権力に随順する言説が行われるようになり、また、一面では大慧宗杲（1089-1163）のよ

うに在家の弟子を介して社会的に大きな影響力を持つ禅僧も現れるようになります。更に労働肯定の思想によって多くの富を貯えた禅宗教団は貨幣経済に飲み込まれ、世俗化が進みます。そして、それと同時に、禅思想が文学、絵画、書道、庭園、建築など、文化の諸方面に影響を与え、「禅文化」と呼ばれるものを生み出し、更には朱子学という儒教の革新運動に繋がることにもなるのです。

しかし、このような知識人と禅との密接な関係は、中国に限られるものではありませんでした。例えば宋代の禅の在り方をそのまま移入した日本においても、中国における禅僧と居士の関係や、禅宗教団を管理する手法までもがそのまま持ち込まれ、また、中国で生み出された禅文化の優品が多数将来されて鑑賞の対象となるとともに、それに劣らぬ作品を生み出しました。そして更に禅はその時々に応じた当時の日本文化に大きな影響を与え、能や茶道、武道、俳諧等を完成へと導いたのです。他の国についてはよく存じませんが、多かれ少なかれ、同様の動きがあったに違いないと思っています。このように見てくると、中国で禅が生まれたことによって、東アジア諸国の歴史や文化がいかに豊かなものになったかが痛感されます。

しかし、ここで忘れてはならないことは、禅は決して過去の遺物などではない、ということです。そのことは、週末に鎌倉の円覚寺境内にある居士林に行ってみれば、すぐに分かります。ここには常日頃、会社などで働いている人たちが、時間が自由になる週末だけ、禅僧と同じような坐禅中心の生活を体験しにやってくるのです。その姿は宋代の居士たちの姿とも重なります。彼らはここでの坐禅体験によって日頃の生活を反省し、悩みや不安を克服し、再び月曜から始まる日常生活に立ち向かおうとしているのです。

更に、この宗教としての禅の意義は、欧米の人たちが最も注目するものでもあります。世界各地に多くの禅センターが存在し、何千もの人たちが坐禅修行に励んでいることは、禅が現代も生きている証しであると言えるでしょう。そして、その思想がジョン・ケージ（约翰・凯奇、1912-1992）

ヤスティーブ・ジョブス（史蒂夫・乔布斯、1955-2011）に影響を与えたとすれば、それは今日においても、禪が新たな文化の創造に寄与しうるものだということになるでしょう。

私は、今、禪のもつ様々な面について言及しましたが、私たちはこの豊富な内容を持つ禪のあらゆる面を明らかにするよう努めるべきだと思っています。そして、それによって、必ずや未来の人間の生き方や文化に大きな示唆を与える何ものかを見出すことができると信じているのです。

このような考え方に立って、私はこれまで禪研究を行ってきたのですが、現在、禪を研究する上で非常に重要になってきていると思うのが国際的な協力体制の構築です。そこで、次にこれについて私の考えを述べたいと思います。

2. 禪研究の国際的ネットワーク構築の必要性

禪宗は唐代には既にチベット、ヴェトナム、朝鮮半島、日本に伝わりました。唐王朝は中国の歴代の王朝の中でも特に文化の面において優れ、周辺諸国は挙ってその文化を学ぼうとしました。こうして「東アジア文化圏」と呼ばれる一大文化圏が形成されたわけですが、それを構成する一つの重要な要素が禪宗であったのです。その後、中国では、宋・元・明・清と時代が進むにつれて仏教も変化し、禪宗にも様々な変化が現れました。そして、禪を受け入れた国々でも、中国における禪の変化の影響を受けつつも、それぞれに独自の展開を遂げ、現在のように各国に特徴的な禪が形成されたのです。

このように、東アジアへの禪宗の伝播は唐代に始まり、明・清に及んだわけですが、近代以降、新たな禪の伝播が始まります。もともとキリスト教が主流であったアメリカやヨーロッパにも禪が広まっていったのです。その先駆となったのは日本の釈宗演（1860-1919）で、1893年、シカゴで開催された世界宗教会議に出席して演説を行い、初めて禪を西洋に紹介し

ました。その後、その弟子である鈴木大拙（1870-1966）が多くの英文の著作を書いて、欧米の人々の禅思想と禅文化に対する関心を高め、それを受けて、臨済宗の中川宋淵（1907-1984）や曹洞宗の鈴木俊隆（1905-1971）らがアメリカで、曹洞宗の弟子丸泰仙（1914-1982）らがヨーロッパで布教を行い、多くの弟子を獲得していったのです。この間、中国の虚雲の弟子、宣化（1917-1995）によるアメリカ布教もありましたが、日本の禅の影響が圧倒的であることは、中国語の「CHAN」ではなくて、日本語の「ZEN」という言葉が一般化したという一事を見ても明らかでしょう。

このように禅の国際化が進展する中で禅研究の国際化も急務となりつつあります。では、世界中の禅研究者が共同で取り組むべき課題としてどのようなものがあるのでしょうか。

先ず行われるべきは、禅を生み出した祖国である中国において、禅がいかにして形成され、また、どのように変化していったかを明らかにすることです。それは禅の特性と意義を明らかにすることであるとともに、その時々中国の禅を学んだ周辺諸国における禅の展開を理解する基礎となるべきものでもあります。

禅の形成過程を明らかにする上で敦煌文書や古くから日本や朝鮮半島で伝えられてきた古文獻が果たした役割の大きさは計り知れません。しかし、資料の発掘はそれで終わったわけではありません。中国・日本・朝鮮（韓国）などの古寺や文庫、図書館などにはまだまだ未知の重要資料が眠っているでしょうし、今日、中国で盛んに行われている遺跡や墳墓の発掘調査の成果は、禅の歴史を解明する重要な資料となり得るものです。こうした新たな資料をそれぞれの国の研究者が紹介しあうことで学界の共有物とし、それに基づいて世界中の研究者が自由に議論を闘わせることは禅研究にとって極めて重要なことです。

もっともこれは、既に胡適（1891-1962）や鈴木大拙以来、常に行われてきたことであるとも言えますが、これまでは歴史的にも密接な関係にある東アジアの国々の間で行われていたに過ぎなかったのに対して、今や文

化的な素養を全く異にする世界中の研究者が参与することによって、全く異なる視点から禅の思想や歴史、文化の解釈を行いうる可能性が開けているのです。これは今までになかった事態です。例えば、ジョン・マクレー（约翰・马克瑞、1947-2011）やベルナール・フォール（伯兰特·佛尔、1948-）の著作はそのことを示すよい例だと言えるでしょう。

しかし、中国における禅の成立と展開の過程を明らかにするだけでは十分ではありません。今や禅は世界中に広まっているのです。我々は世界各国における禅の受容と展開の過程を個別に明らかにしていかななくてはなりません。もちろん、言うまでもないことですが、ここでいう「世界各国」には、東アジアの国々だけではなく、アメリカやヨーロッパの諸国も含まれています。それによって私たちは、各国の個性を知るとともに、禅そのものが含み持つ可能性を明らかにすることができるはずで

このような研究は、正しくその当の国の研究者でなくては十分には行えないものですが、それで済む問題ではありません。何故なら、その国の禅の特質は他の国の禅と比較して初めて露わになるものだからです。従って、この種の研究においては、他の国の研究者の視点や見解は極めて重要な意味を持ちます。正しく国際協力なしにはなしえないものなのです。

この各国の禅の特性を理解するという点において、避けて通れない一つの重要な問題があります。それは、欧米における禅理解が主に日本の禅に基づいているという点です。先に触れたように、欧米に禅を広めたのは日本の臨済宗や曹洞宗の人々でした。そのインパクトは非常に大きく、普通、欧米人がイメージする禅とは、禅を生み出した中国のそれではなく、日本のそれなのです。

しかし、これはそのような歴史的な経緯だけが理由ではなく、現在に伝わる中国の禅と日本の禅の間に見られる根本的な相違が関係しているように思われます。つまり、日本の禅が、基本的には、宋代の禅を継承しているのに対して、中国の禅は明代以降に大きく変化した禅を承けているのです。具体的に言えば、日本の禅は、師匠の指導のもとで禅修行に励むこと

のみによって「悟り」を開くという点で唐代以来の禅の伝統を堅持しているのに対して、中国の禅は念仏を導入し、經典の学習を重視する、「禅淨双修」「教禅一致」「諸宗融合」の傾向を強くもっているということです。そして、欧米の人々が惹かれたのは、正しく、日本の禅に見るような、自らが得た「悟り」を絶対化し、自己の外に何らの権威や価値を認めないというその在り方にこそあったと思われるのです。

この禅特有の思想は、キリスト教とは正に対照的です。キリスト教では造物主たる神と被造物たる人間は絶対的に隔絶されたもので、罪深い人間に認められるのは、絶対者である神の存在を信じて許しを請うことだけです。しかし、近代合理主義の中でキリスト教的な神の存在を信じることはますます難しくなっています。そうした中で禅修行によって自らの絶対性に気づくことだけに意義を見出す禅が、彼らにとっていかに新鮮なものに見えたかは想像に難くないのです。鈴木大拙が英文の著作で紹介した唐代や宋代の禅僧たちの言葉は、正しくそれに応えるものであったと言えるでしょう。

この理解が大きく間違っていないとすれば、欧米人にとって、中国の禅は日本の禅ほどには魅力的に見えないはずですが。念仏を行い、經典を学ぶことは、取りも直さず、自分の外に権威を認めることになります。そして、それは正しく、臨濟義玄(?-867)などの歴代の偉大な禅師たちが批判した当のものに外なりません。臨濟は「乃至三乘十二分教。皆是拭不淨故紙。仏是幻化身。祖是老比丘」だと言い、「逢仏殺仏。逢祖殺祖」しろと言ったではありませんか。

私は以前から、この問題は中国の禅が世界に広まる上で大きな障害となるものではないかと考えています。しかし、もしも世界の通念となっている「禅」、即ち日本禅に対して、中国禅独自の意義やアイデンティティーを明確に示しうるならば、今後、中国の禅には更に大きな発展が期待できるのではないかと考えています。これは中国の仏教界の指導者たちが解決しなくてはならない大きな問題です。また、それを解決するための指針

を示すことは中国・日本を初めとする世界の禅研究者たちの任務であると思います。なぜなら、その指針は、明代以降における中国の禅の変化がどうして生じざるを得なかったのか、そして、それに対して、なぜ日本の禅は古い形を維持することができたのかということを経史的に明らかにすることによってしか得られないと思うからです。

上に述べてきましたように、今日の禅研究においては、国際的な協力が不可欠になっています。そのために我々は世界中の研究者を結びつける国際的なネットワークの構築を急がなくてはなりません。そして、その場合、そのネットワークの中核を担うべきは、禅を生み出しそれを東アジア全域に広めた中国と、これまで世界の禅研究をリードし、また、禅を欧米に広めてきた日本であることは何人も否定できないと思います。この点で、今年、時を同じくして中国の武漢大学と日本の東洋大学に禅の思想・歴史・文化を研究する国際的な拠点が形成されたことは非常に大きな意味を持つものだと思います。次にこのことについての私見を述べたいと思います。

3. 「武漢大学国際禅文化研究中心」設立の意義

この度、「国際禅文化研究中心」が設置される武漢大学は、言うまでもなく、湖北省における学術研究の中心ですが、この湖北省は禅宗の歴史のなかで極めて重要な位置を占めています。禅宗は南インド出身の菩提達摩が中国にやって来たことから始まるというのが禅宗の伝統的な考え方ですが、私見に拠れば、禅宗の直接的な母体は四祖道信（580-651）・五祖弘忍（602-675）の東山法門に求めるべきなのです。

東山法門では数百人もの修行者が集まり、農作業を含む種々の労働を実践しながら「悟り」の獲得を目指して修行生活を送っていました。そのような修行生活の中で、「悟り」は日常から切り離された禅定の中に求めるべきものではなく、日常生活のただ中で実現されねばならないという思想

が育まれたのです。しかも、彼らは農作業を行うという点で、厳密な意味では戒律を守ることができず、それゆえ、正式の僧侶に与えられる特権を享受することもできませんでした。つまり、彼らは非僧非俗の存在で、国家が認めることのできないアウトローの教団だったのです。彼らは、そういう在り方を敢えて選ぶことで、権力や権威から解き放たれた自由な思想と独自の生き方を手に入れました。これこそが本当の意味での禪と禪思想の起源なのです。

この東山法門が拠ったのが、この湖北省に位置する四祖山（双峰山）と五祖山（憑茂山）だったのです。私見に拠れば、禪宗がここで起こったのは決して偶然ではありません。東山法門のような教団が起こるためには、少なくとも次のような二つの条件を満たす必要がありました。

1. 皇帝権力の中心地である中原から、一定の距離以上、離れていること。
2. 農業によって数百人の修行者を養いうるような温暖な気候に恵まれていること。

この二つの条件を正しく満たしたのが、この湖北という土地であったと言えるのです。しかし、この条件を満たす地域は外にもあるのではないのでしょうか。確かにそうです。しかし、歴史的に見ると、湖北省でなくてはならない理由があったのです。

道信が禪を学んだ人物は、伝統的には僧璨（生歿年未詳）であると言われています。しかし、それは資料的には確認できていません。ただ、弘忍の弟子たちが、菩提達摩—慧可—僧璨—道信—弘忍という系譜を挙げて認めていたのですから、道信の師の名前が何であれ、その人物が慧可（生歿年未詳）の影響を強く受けた人物であったことは間違いないでしょう。そして、慧可の弟子たちは、北周の武帝の破仏から逃れるために北朝と南朝の境に位置する湖北の山林に身を潜めたと考えられますから、そうした人物の一人に道信が師事したとするのは自然な推定です。つまり、自然環境と歴史的状況という二つによって、湖北という土地だけが禪宗を生み出し

得たのです。

その後も禅宗と湖北省との関係は密接でした。東山法門の教えを洛陽や長安に伝えた神秀が、入京以前に住んだのは湖北省の荊州でしたし、石頭希遷（700-790）と馬祖道一に学び、雲門宗・法眼宗の源流となった天皇道悟（748-807）が活躍したのも荊州でした。宋代初期に雲門宗が興隆する契機となった智門光祚（生没年未詳）が住んだのも湖北省の随州でしたし、同じ頃、曹洞宗の祖統を伝え、守り、その復活を可能にした大陽警玄（943-1027）が住んだのも湖北省の鄂州でした。更に、時代は迥かに降って、「中国近代仏教の父」と讃えられる太虚大師（1890-1947）が1922年に初めて仏学院を設置したのも、この武昌の地でした。その意味で、武漢は中国における仏教近代化の原点であるともいえるのです。太虚は禅宗を中国に相応しい仏教だと認め、禅宗の生活規範を再興することが必要だと考えました。太虚が社会において仏教の果たす積極的な意義を強調し、「人生仏教」というスローガンを唱えた基礎には、「平常心是道」という禅の精神があったと考えられます。

このように湖北省と禅宗との関係には極めて深いものがありますが、その省都に位置する武漢大学は、1893年に「自強学堂」として設立されて以来、120年を超える歴史を持つ名門大学であり、しかも、熊十力（1885-1968）が教鞭を執るなど、仏教研究においても大きな役割を果たしてきました。熊十力は仏教思想を現代に生かそうとした先駆者であり、武漢大学には、その伝統が現代に至るまで脈々と受け継がれているように見うけられます。

このように湖北省は禅宗を生み出した土地であり、宋代には雲門宗が隆盛に向かい、曹洞宗が復活を遂げる契機となり、また、近代において中国仏教が再生する上で大きな役割を果たした土地でもあります。そして、今、この湖北省の省都に、しかも仏教研究の伝統が息づいている武漢大学に「国際禅文化研究中心」が設けられ、国際的な協力のもとで新たな禅研究が始まろうとしています。「歴史は繰り返す」と言います。この研究所

は必ずや大きな成果を齎すことになるでしょう。

最後に、今年、時を同じくして東洋大学に「東洋学研究所国際禅研究プロジェクト」が設けられたことの意義についても触れて、私の講演を締め括りたいと思います。

4. 「東洋大学国際禅研究プロジェクト」の設立と共同研究の必要性

これまで世界の禅研究の中心は日本でした。そして、日本の禅研究を担ってきたのは、東京の駒澤大学と京都の花園大学であり、両大学は現在も禅を専門とする多くの研究者を擁し、素晴らしい研究業績を挙げ続けています。しかし、こと国際交流という点に関しては、十分な成果を挙げ得ていないように見受けられます。その大きな理由は、それぞれ日本の曹洞宗、臨済宗という特定の宗教団体が設置したものであり、その宗派の立場から自由ではない、あるいは自由でないという外部の人々から見られているところにあるように思われます。現に、禅思想と禅文化の意義を世界に広めるには、両大学の協力が不可欠であるはずなのに、そうした取り組みはほとんど見ることはできません。

こうした状況は世界の禅研究において決して望ましいものではありません。禅研究がほとんど日本だけで行われていた時代には、二つの大学が相互に反撥しあい、競いあうことが研究成果を上げるうえで役だったかも知れませんが、禅が世界に広まり、世界中で研究が行われているという状況になった今、日本の研究機関が国内だけで張り合っても何の意味もありません。むしろ国内の研究者をまとめ上げ、海外の研究者とのネットワークを構築し、世界全体の禅研究を推進する役割を果たすことこそ成さねばならないことのはずなのです。

こうした役割は、もちろん資金的にも組織的にもしっかりした基盤をもつ駒澤大学や花園大学が担うべきものです。そして、やがてそうなるに違

いないと私は信じていますが、残念ながら現状ではそうっていないのです。そこで、そうなるまでの間、それへの橋渡しとしての役割を果たす組織が絶対に必要です。そして、その目的を達成すべく、今年、私が中心となって文部科学省の科学研究費助成金を得て、東洋大学の東洋学研究所内に設置したのが、この「国際禅研究プロジェクト」なのです。

このプロジェクトについて語る前に、東洋大学と東洋学研究所について語らねばなりません。皆さんは、あるいは「東洋大学」という名前を聞いたことがないかも知れません。しかし、武漢大学以上に古い歴史をもつ大学なのです。その前身は、東京帝国大学の第一回卒業生であった井上円了（1858-1919）が、1887年に「哲学」を教えるために設立した「哲学館」であり、以後、130年に及ぶ歴史を刻んでいます。井上円了は、ソクラテス・カント・釈迦・孔子を「四聖」と呼び、古今東西の思想を等しく尊びましたが、井上個人の思想は仏教思想を中心とするものでした。そして、あまり知られていないかも知れませんが、彼の仏教思想は、中国近代化の中心人物であった康有為（1858-1927）や梁啓超（1873-1929）にも大きな影響を与えているのです。このような経緯のため、東洋大学は、設立以来、「諸学の基礎は哲学にあり」を「建学の理念」として「哲学」を標榜してきました。このような大学は外に例がなく、日本の大学の中でも独自の位置を占めています。

こうした歴史が示すように、東洋大学の特徴は、特定の立場に囚われることなく自由に哲学を研究するということにあります。そして、東洋思想の研究、特に井上円了以来の仏教研究の伝統を生かし、後世に伝えるために設立されたのが東洋学研究所です。以上のような大学の歴史を踏まえれば、この研究所内に「国際禅研究プロジェクト」を設置することの意味は自ずと明らかだと思います。すなわち、このプロジェクトは、臨済宗・曹洞宗の枠を超えた完全に自由な立場で禅研究を行い、日本国内の様々な立場の研究者たちを糾合するとともに、世界の研究者たちとの情報ネットワークの日本における結節点としての役割を果たすことで、日本の禅研究

の伝統を将来に繋げようとするものなのです。それは正しく「武漢大学国際禅文化研究中心」が中国において目指している当のものであろうと思います。時を同じくして目的を同じくする二つの研究組織が中国と日本に誕生したということは、それが正しく時代の要求に応えるものであることを示すものでしょう。従って、我々は、今後、相互に協力し合って研究を進めてゆくべきです。そして、一緒になって世界の禅研究を推進して行こうではありませんか。

本日は非常に雑駁な話で恐縮ですが、これで私の講演を終わらせていただきます。武漢大学の先生方の率直なご意見をお聞かせ頂けましたら幸甚でございます。ご静聴ありがとうございました。